Uttarajjhayaṇa X 1-36d
samayaṃ goyama mā pamāyae
－使役法中動態に由来する中期インド語動詞－

阪　本（後　藤）　純　子

0. 中期インド語には，使役語幹 (Kausativ: Kaus.) の形態を示しながら，通常の使役語幹からは説明できない意味 －基本動詞の受動の意味，あるいは基本動詞と同様の自動詞や他動詞の意味など－ で用いられている一連の動詞が存在するが，それらは古代インド語(Ai.)の使役語幹の中動態(Medium: Med.)に由来すると想定される（筆者： Zu mittelindischen Verben aus medialen Kausativa, Jain Studies in Honour of Jozef Deleu, Tokyo 1993, p.261–314参照)(1)。Med.は中期インド語 (Mi.) では，若干の遺存形を除き，もはや生きた文法的カテゴリーとして機能しなくなるので，それらの動詞は形態上は -aya- ないし -paya-語幹の能動態 (Aktiv: Akt.) と基本的に一致する。しかし意味の上からは，Kaus.Akt.からの歴史的発展によっても，また，Mi.内部で新たに形成された（Kaus.とは無関係な）-e-現在語幹，Denominativ，目的語の省略等の解釈によっても，説明することが困難である。本稿で取り上げる，Uttarajjhayaṇa X 1-36d 等のジャイナ経典や仏典に現れる pra-mad の Kaus.もその１例であると思われる。

1. 始めにKaus.Med.の用法について概観したい（詳細は筆者上掲論文参照）。

1.1. Kaus.は本来，基本動詞の行為に対し使役 (faktitiv) の意味を表現する機能を持つ：主語が誰か／何かに何かをさせる（基本動詞が行動を表す場合：facientiv）；主語が何かを生起せしめる（基本動詞が経過ないし状態を表す

場合：fientiv）。Kaus.が Med.で活用すると，reflexiv（または direkt-reflexiv：再帰的；主語自身を直接補語とする），affektiv（または indirekt-reflexiv：関与的；主語自身を間接補語とする）または reziprok（相互的；複数の主語間に相互に直接／間接補語の関係が存在する）の意味がこれに付け加わる。自動詞または他動詞というシンタックス上の振る舞い方の観点からは，Kaus.Med.は以下のように分類できる：

A.　基本動詞が自動詞：主語（基本）＋動詞（基本）
Kaus.Akt.：主語 (Kaus.) ＋目的語 (Kaus.) ＋動詞 (Kaus.)
目的語 (Kaus.) =主語（基本）

A-1.　Kaus.の reflexiv Med.: 主語 (Kaus.) =目的語 (Kaus.) =主語（基本）
máda-ti/mā́dya-ti　「喜ぶ，酔う」
mādáya-ti　「誰かを (Akk.) 喜ばせる，酔わせる」
mādáya-te　「自分自身を喜ばせる，酔わせる」即ち「自分自身が喜ぶ，酔う」
事実上，mādáya-te = máda-ti/mā́dya-ti

Cf. BHS pra-mādaya-ti, Amg/JM pa-māe-i「不注意／怠慢である」（後述）

Kaus.Med.の意味は自分自身に対する使役ということから，いわば基本動詞の意味に戻り（Delbrück, Altindische Syntax, Halle an der Saale 1888, 223f.参照），自動詞として用いられる。

A-2.　Kaus.の affektiv Med.:
「自分自身に対して／のために／から／と共に／に帰属する」等
ā́-gaccha-ti　「来る」
ā́-gamaya-ti　「誰か／何かを (Akk.) 来させる」
ā́-gamaya-te　「誰か／何かを (Akk.) 自分自身のところに来させる」更に「誰か／何かを (Akk.) 待つ，忍耐する」

Cf. Pāli/BHS ā-game-ti「誰か／何かを (Akk.) 待つ」

Cf. Pāṇini I 3,21 に対する Vārttika 2 および Kāśikā: āgamayasva tāvan māṇavakam「まずは若者を待て」

シンタックス上の構成は Kaus.Akt.も Kaus.Med.も同じであり，他動詞として機能する。Med.は，動詞の行為が何らかのあり方で主語に関与することを付加的に表現するに過ぎない。

A-3.　Kaus.の reziprok Med.:「相互に」

sáṃ-vadante　「彼（女）らが話し合う」

sáṃ-vādayante　「彼（女）らが自分達自身を相互に話し合わせる，相談する」

reziprok Med. は主語自身が基本動詞の直接補語に一致するか，間接補語に一致するかにより更に分類できるが，ここでは省略する（筆者 op. cit. 297 Anm. 2 参照）。

B.　基本動詞が他動詞：主語（基本）＋目的語（基本）＋動詞（基本）

Kaus.Akt.：

主語 (Kaus.)＋目的語 (Kaus.) 1＋目的語 (Kaus.) 2＋動詞 (Kaus.)

目的語 (Kaus.) 1=目的語（基本）

目的語 (Kaus.) 2=主語（基本）

B-1.　Kaus.のreflexiv Med.:

主語 (Kaus.)=目的語 (Kaus.) 1=目的語（基本）

páśya-ti　「誰か／何かを (Akk.) 見る」

darśáya-ti　「誰か／何かを (Akk.) 誰かに (Akk./Instr.) 見させる」

darśáya-te　「自分自身を誰かに (Akk.) 見させる」即ち「誰かの前に (Akk.) 現れる」

Cf. Pāli (ud-, paṭi-) dasse-ti「誰かの前に (Akk./Gen.) 現れる」

Cf. Pāṇini I 3,67 Kāśikā: darśayate rājā svayam eva「王が自ら姿を現わす」

自分自身が基本動詞の行為の対象となるので，この種の Kaus.Med. は一種の受動として機能する。(sich sehen lassen ～ gesehen werden; se laisser voir ～ etre vu; let see oneself ～ be seen 等と比較せよ。)

B-2. Kaus.のreflexiv Med.: 主語 (Kaus.) =目的語 (Kaus.) 2=主語 (基本)

céta-ti 「認識する」

cetáya-ti 「誰か／何かを (Akk.) 誰かに (Akk./Instr.) 認識させる」

cetáya-te 「誰か／何かを (Akk.) 自分自身に認識させる」即ち「知覚する，理解する，考える」

事実上，cetáya-te = céta-ti

Cf. Pāli (/BHS) cete-ti「(...と：iti; 何かについて：Akk.) 考える，何かを (Akk./Dat.) 望む」

Kaus.Med.の意味はA-1と同様に基本動詞の意味に戻る。

B-3. Kaus.のaffektiv Med.:

「自分自身に対して／のために／から／と共に／に帰属する」等

páca-ti 「何かを (Akk.) 煮る」

pācáya-ti 「何かを (Akk.) 誰かに (Akk./Instr.) 煮させる」

pācáya-te 「自分自身のために何かを (Akk.) 誰かに (Akk./Instr.) 煮させる」

Cf. Pāṇini I 3,74 Kāśikā: odanaṃ pācayate「(誰かに) 粥を自分のために煮させる」

B-4. Kaus.の reziprok Med.:「相互に」A-3 参照。

C.　Diathesisに機能的対立がある場合： [Med.::Akt.] = [自動詞::他動詞]

Ṛgveda（およびマントラ文献）：

várdha-te「成長する」:: várdha-ti「成長させる」

その後の文献：

várdháya-ti　「成長させる」～ várdha-ti

vardháya-te　reflexiv「自分自身を成長させる」～ várdha-te

affektiv「何か自分自身に属するものを (Akk.) ／何かを (Akk.) 自身のために成長させる」

1.2.　Veda，特に Ṛgveda においては Med.が文法的カテゴリーとして十分に機能しており，Kaus.に関しても上記のようなMed.の用法が生きていて，多数の用例が見つけられる。Pāṇini (I 3,67-71; 74; 89) においても Kaus.Med. が規定され，Kāśikā 等の注釈に例示されている。しかし文法的カテゴリーとしての Med.は既に Ai.において徐々に廃れてゆく。叙事詩および古典サンスクリットでは，特定の場合をのぞき，その機能がもはや明瞭には看取されなくなり，Med.語形は例えば単に文体上のあるいは韻律上の必要から，動詞の意味に影響を及ぼすことなく，Akt.語形の代わりに用いられるに至る。reflexiv ないし affektiv の意味は ātmán- 等の名詞を再帰代名詞として使用することにより，またreziprokの意味はanyonyam 等の副詞により明示される。このような言語発展はMi.におけるMed.の消滅に至って完了する。その結果，Kaus. Med.は Kaus.Akt.と同じ形態を取ることとなり，Akt.の形態と本来のMed.からの意味との齟齬が引き起こされる。

1.3.　ある Mi.の Kaus.動詞が，Kaus.Med.から導くことのできる意味で用いられている場合，それが本当に Kaus.Med.に由来することを確定するのは容易ではない。前述のように Mi.においては文法的カテゴリーとしての Med.が消滅し，特殊な場合（決まり文句，文体・韻律上の必要，現在分詞 -māna-の愛好など）を除きMed.語形は用いられないので，外見からは起源における

Akt.と Med.の区別が付かない。さらに -a-現在語幹に代わる -e-現在語幹の形成が非常に生産的となり，-e-/-aya-語幹の動詞には，Kaus.，第10種動詞（いわゆるIterativ等），Denominativ，Mi.の新しい -e-現在語幹等の多くの可能性が考えられる。また，目的語の脱落，他動詞の絶対用法等の現象も考慮に入れる必要がある。従って個々の事例を詳細に検討することにより始めてKaus.Med.からの発展の経過を明らかにすることが可能になる。まず対応する Kaus.Med.が Ai.に存在する場合，そこからの発展が跡づけられる（例：pra-mad, chand, ā-gam, dṛś, pari-car, cit, ni-vas, vid, abhi-vad, spṛś, saṃ-vad, ā-chad）。問題の Mi.動詞が -pe-/-paya-語幹であれば Kaus.以外の語幹の可能性が排除される（例：pari-kṣi, pari-nir-vā, ram, snā）。本文ないし注釈にattan-(ātmán-) や tuma- (tmán-) のような再帰代名詞あるいは anyonyam のような副詞が存在すれば，本来 Med.に属していた機能 (reflexiv/affektiv/reziprok) が確認される（例：duṣ, pari-nir-vā, ram, dṛś, rakṣ, pari-car）。更に，Kaus.の Passiv を示す -iya-語幹が Kaus.に対し Med.の標識として用いられることがある[2]（例：svad, vid, pari-car, [vi-]vad, pālaya-）。

1.4. Kaus.Med.に由来すると想定される Mi.の動詞は以下の通りである（通常の Kaus.Akt.の意味での用法が併存する場合もあるが省略する）：

A-1. **ā-gam** (1): āgamaya-ti「自らを来させる → 来る」BHS

duṣ: dūse-ti「自らを損なう → 破滅する」Pāli

pari-kṣi: parikkhayāpe-ti「自らを消滅させる → 消滅する」Pāli

pari-nir-vā: parinirvāpaya-ti「自らを完全に涅槃に至らしめる → 完全な涅槃に至る」BHS

pra-mad: pramādaya-ti/pamāe-i「自らを不注意／怠慢にする → 不注意／怠慢である」BHS Amg JM（後述2.3.– 2.8.）

pra-vraj: pravrājaya-ti「自らを出家させる → 出家する」

yā: yāpe-ti/yape-ti「自らを行かせる → 行く，動く，活動する，（何

かにより:Instr.）生きてゆく」Pāli BHS(3)

ram: ramāpaya-ti「自らを楽しませる → 楽しむ」Pāli; cf. ramaya-ti「楽しむ」Ep., Kl.Skt.

sthā: ṭhape-ti「自らを立たせる → 立っている，存続する」Pāli

snā: snāpaya-ti/snapaya-ti「自らを沐浴させる → 沐浴する」BHS

A-1.（またはB-2.）

sam-pad「成就する，完成する，生ずる，到達する」等：sampāde-ti「自らを完成する，自らに願望を成就させる → 願望を成就する，理想を達成する」Pāli(4)

A-2.　**chand**「（良く）現れる，気に入る」：chāde-ti「何かを (Akk.) 自らに気に入らせる → 気に入る，好む」pāli; cf. chandaya-te「何かを (Akk./Lok.) 自らに気に入らせる → 気に入る，好む」Ṛgveda

ā-gam (2)：āgame-ti「誰か／何かを (Akk.) 待つ」Pāli BHS; cf. Ai. ā́gamaya-te「誰か／何かを (Akk.) 待つ」；Pāṇini I 3,21 Vārttika 2, Kāśikā（上述1.1.A-2.）

(ā-) **svad**「おいしくなる」：*(ā-) svādaya-te「自らに何かを (Akk.) おいしくする → 味わう，楽しむ，享受する」

1. assāde-ti「何かを (Akk.) 楽しむ，享楽する」Pāli
   āsāde-ti/assāde-ti「何かを (Akk.) 味わう」Amg
2. sāya-ti「何かおいしいものを (Akk.) 味わう」Pāli
3. sādiya-ti「何かを (Akk.) 享受する，受け入れる」Pāli
   sāijja-ti「何かを (Akk.) 受け入れる」Amg
   svādīya-ti「何かを (Akk.) 喜ぶ」BHS
   sādīya-ti「誰かと (Akk.) つき合う」BHS

Cf. svadáya-te「何かを (Akk.) 自分のためにおいしくする」Ṛgveda; (ā-) svādaya-ti「何かを (Akk.) 味わう」Ep., Kl.Skt.

A-3.　(vi-) **vad**: (vi-) vādaya-ti/vādiya-ti「論争する，喧嘩する」Pāli; vivāde-ti「論争する，喧嘩する」BHS

sam-sthā: saṇṭhape-ti「相互に取り決める，約束する」Pāli

B-1. **(ud-, prati-) dṛś**: (ud-, paṭi-) dasse-ti「誰かの前に (Akk./Gen.) 現れる」Pāli; cf. Ai.darśaya-te, darśaya-ti（単独または＋ātmānam）「自らを見せる，現れる」；Pāṇini I 3,67 Kāśikā（上述1.1.B-1.）

rakṣ: rakkhāpe-ti「自らを誰かにより (Instr.) 守らせる」Pāli

(prati-) upa-sthā: (paṭi-) upaṭṭhāpe-ti「自らに奉仕させる」Pāli

A-1.またはB-1.

pari-car「歩き回る（自動詞）；取り巻く，奉仕する（他動詞）」：

pari-cāre-ti/paricāraya-ti「（誰かと:Instr.）楽しむ」Pāli

paricāraya-ti「歩き回る；（誰かと:Instr.）楽しむ」BHS

（A-1.「自らを（好きなように）歩き回らせる」；B-1.「誰かに (Instr.) 自らを取り巻かせる，自らに奉仕させる」）

Cf. Ai. pari-cāráya-te「誰かに (Instr.) 自らを取り巻かせる，自らに奉仕させる」

B-2. **upa-sthā**:upasthāpaya-ti/upasthāpe-ti「誰かに(Akk.)奉仕する，仕える；治療する」BHS

cit: cete-ti「（...と：iti; 何かについて：Akk.）考える，何かを (Akk./Dat.) 望む」Pāli/BHS; cf. Ai. cetáya-te「自分自身に誰か／何かを (Akk.) 認識させる」即ち「知覚する，理解する，考える」

ni-vas「着る，着ている」：nivāse-ti「何かを (Akk.) 着る，着衣している」Pāli; cf. vāsaya-te「自らに何かを着せる→何かを (Instr.) 着る」Ṛgveda

(prati-, prati-sam-) vid:

(paṭi-) vede-ti/vediya-ti「何かを (Akk.) 認識／知覚／感受する，感じる」Pāli

paṭisaṃvede-ti/paṭisaṃvediya-ti「知覚／感受する，感じる，（行為の結果を）受け取る」Pāli

pratisaṃvedaya-ti「認識／知覚／感受する，（行為の結果を）受け

取る」BHS

Cf. Ai. vedáya-te「自らに認識／知覚／感受させる → 認識／知覚／感受する」

(ā-) hṛ: (ā-) harāpe-ti「自らに何かを (Akk.) 取らせる → 取る」Pāli

pari-car: paricāre-ti「誰か／何かに (Akk.) 宗教的に奉仕する，崇敬する」Pāli; paricāraya-ti「ある場所を (Akk.) 歩き回る；誰かに (Akk.) 奉仕する」BHS

ava-hṛ: ohāre-ti「自らに何かを (Akk.) 取り除かせる，取り除く」Pāli[5]

B-1.またはB-2.

adhi-vas:

adhivāse-ti/adhivāsaya-ti「1.（住処・食事・招待等を：Akk.）受け入れる，同意する；2.（苦痛等を）耐える；3. 待つ」Pāli

adhivāsaya-ti（上記1.2.の意味）BHS

（B-1.「自らにある場所を (Akk.) 住処とさせる」；B-2.「あることに (Akk.) 自らを住処とさせる」）

spṛś: phasse-ti/phusse-ti[6]「宗教的目標に (Akk.) 到達する」Pāli

phāse-i/phāsa-i[7]「何かに (Akk.) 触れる，宗教的行為を (Akk.) 実践する，宗教的目標に (Akk.) 到達する」Amg

（B-1.「何かにより (Akk./Instr.) 自らを触れさせる」；B-2.「自らに何かを (Akk.) 触れさせる」）

Cf. tan$_u$vàṃ sparśaya-te「誰かに (Instr.) 自分の体を触れさせる」Ṛgveda

B-2.またはB-4.

adhi-vad: adhivāde-ti「誰かに (Akk.) 話しかける，挨拶する」Pāli

（B-2.「自らを誰かに (Akk.) 話しかけさせる，挨拶させる」；B-4.「相互に話しかけさせる，挨拶させる」）

Cf. adhivādaya-ti/-te「誰かに (Akk.) 話しかける，挨拶する」Ep., Kl. Skt.

その他（Kaus.と確定できない動詞およびDenominativ）のMed.

Uttarajjhayaṇa X 1-36d　－使役法中動態に由来する中期インド語動詞－

ā-chad: acchāde-ti「自らに衣服を (Akk.) 着せる，着る」Pāli[8]

Cf. Ai. chādáya-te「自らを（衣服で：Akk.）覆う」

pālaya-: pāle-ti/pāliya-ti「自らを守る」Pāli

1.5.　Kaus.Med.に由来すると推測されるMi.動詞の特徴は，A-1.およびB-2.に属する動詞の頻出である。この両タイプには構造的な共通点がある：Kaus.の主語が基本動詞で表される行為の実際の行為者と同一であり，その結果，Kaus.で示される行為の内容が基本動詞のそれと実質的には一致することになる。それでは何故このようなKaus.表現が基本動詞の代わりに選択されたのであろうか。恐らくこのタイプの表現方法　－いわば再帰的な使役－　には特定の機能が存在したと思われる。本論文では省略したが上記の動詞の使用例を詳しく検討すると，主語自身の意志が動詞の行為に関与すること，ないし，主語自身の出来事に対する責任が強調されていることに気付く。（後述2.3.–2.8., 3.の pra-mad の場合にもこのような意味合いが看取される。）従ってA-1.および B-2.のタイプの機能は「主語自身の Initiative の強調」にあると推測される。この意味成分 (Noem) は現実には「自由意志に基づくこと，意図的であること，決意，責任，やむを得ないこと，努力，敢えてすること，大胆さ，図々しさ，恣意的であること」等の多様なニュアンスとして実現されている。

A-1.と B-2.のタイプは既に Veda に現れるが，Ai.の文法家達には言及されていない。同一の動詞がB-1.とB-2.の両方で用いられる場合には，B-1.の方が B-2.よりも古い文献に現れる。

2.　Kaus.のreflexiv Med. (A-1) に由来する動詞の１例として Buddhist Hybrid Sanskrit (BHS), Ardhamāgadhī (Amg), および Jaina Māhārāṣṭrī (JM) における pra-mad の Kaus.が挙げられる。

2.1.　mad「楽しむ，酔う」の現在形は Veda 古層では máda-ti, Veda 散文

以降ではmā́dya-ti, Mi. majja-ti/majja-i（補語は Instr., Gen., Lok., 時にAkk.）である（T. Gotō, Die "I. Präsensklasse" im Vedischen, Wien 1987, 235ff. および Anm.514参照）。pra との結合では「（あることから）注意を逸らしている，不注意／なおざり／怠慢である，ぼんやりしている，怠けている，怠る」等を意味し（漢訳「放逸」），Simplex 同様に自動詞として用いられる。

「何から注意を逸らしているか，何に関して怠慢であるか，何を怠るか」を表す補語は，Ai.では本来は Ablativ により，後には Lokativ によっても表される（Pāṇini I 4,24に対する Vārttika 1 および Mahābhaṣya 参照：dharmāt pramādyati「義務に関して怠慢である，義務を怠る」）。Pāli では Akkusativ または Lokativ，ときには Genetiv 等で表される。定動詞との結合では Akk. の頻度が最も大きく韻文でも散文でも用いられる；特に dhammam ＋ pra-mad「義務に関して怠慢である，義務を怠る」の表現が頻出する (Dhamma-pada 259; Jātaka V 123,27; 223,15f.; 326; VI 94,30)。Lüders の指摘したように (Beobachtungen über die Sprache des buddhistischen Urkanons, Berlin 1954, §193)，このAkk.は本来 -aṃの形で終わる Abl.であった可能性がある。しかし Pāli 経典では tapas (Jātaka IV 241,28: Śloka c) や idam (Caryāpiṭaka II 9,6: Śloka b; 禁止文 mā pamajji, 後述2.2.参照) のような Abl.から発展したとは説明できない語形も見い出されるので，少なくともそれらの経典の段階では，pra-mad は Akk.を支配する他動詞と意識されるようになっていたと考えられる。

Kaus. Akt. pra-mādaya-ti には「（ある人を：Akk.）不注意／なおざり／怠慢な状態にする，怠けさせる」等の意味が予想されるが Ai.では知られていない；Pāli 経典には用例がある（Saṃyutta-Nikāya IV 307,16 attanā mato pamatto pare mādetva pamādetvā「みずから酔い，不注意になっており，他人を酔わせ，不注意な状態にして」）。

Kaus.の reflexiv Med.としては上述1. A-1.のmadの例に準じて，pra-mādaya-te「自分自身を不注意／怠慢な状態にする，怠けさせる」即ち，「自分自身が不注意／怠慢になる／である，怠ける」という意味が予期されるが，Ai.お

よび Pāli には知られていない[9]。affektiv Med.には用例がある：itthám tvā prámādayiṣyāmahe「この様にして我々は君を（我々のために）怠けさせる」Śatapatha-Brāhmaṇa [Kāṇva] IV 2,4,4（～[Mādhyandina] III 2,4,6 prámodayiṣyāmahe「...喜ばせる」）。

これに対し，Simplex の場合は，上記1. A-1. の例としても挙げたように，Kaus.の reflexiv Med. mādáyaź-te「自分自身を喜ばせる，酔わせる」即ち「自分自身が喜ぶ，酔う」がṚgvedaおよび関連マントラに頻出する（T. Gotō 235 および Anm. 517 参照）：例 asmíñ chūra sávane mādayasva「このソーマの献供において，勇士よ，酔え（楽しめ）」Ṛgveda II 18,7 (Triṣṭubh d)（用例については Grassmann および Böhtlingk 参照）。

2.2.　pra-mad の用例で特に注目されるのは，Ai.と Pāli に頻出する禁止文 (Prohibitiv：mā ＋ Injunktiv) である。Ai.では Atharvaveda 以来，固定した表現として語幹pra-mada- の Injunktiv（Inj.: 2. Sg. pramadas 等）が用いられる。pra-mada- は本来現在語幹であるから，その Inj. は「既に進行中の行為・出来事に対する禁止，つまり中断の要請(Inhibitiv)」であることが予想されるが，mā pra-mada- の表現は本来 Aorist の Inj. で表現されるべき「まだ発生していない行為・出来事に対する禁止 (Präventiv)」ないし「一般的禁止 (genereller Prohibitiv)」の価値で用いられる：例 tásmān mā́ prá madata「それ故君達は不注意であるな」（Aśvamedha 祭）Śatapatha-Brāhmaṇa XIII 4,2,17; svādhyāyān mā pramadaḥ「学習に関して怠慢であるな（学習を怠るなかれ）」（入門式）Taittirīya-Āraṇyaka VII 11,1; Taittirīya-Upaniṣad I 11,1。mad の普通の現在語幹は Veda 散文以降は mā́dya-, Mi. majja- であることから，本来現在語幹であるmada- が Aorist 語幹であると解釈されたためと考えられる。（T. Gotō 237 Anm. 524; K. Hoffmann, Der Injunktiv im Veda, Heidelberg 1967, 91参照。）

この表現法は Pāli にも生き続け，Ai. pra-mada- から直接・間接に発展した Inj.が禁止文に残る：2.Sg. pāmado, pamādo, pamāda, *pamado, 1. Pl. pamadamhase[10]。最も頻繁に現れるのは 2.Sg.pamādo であるが，韻律上は常に－∪

－の形が期待され，本来は pāmado（*pra-a-mada-s: Pāli で一般的な Augment 付き Inj.）であったと推測される(11)。現実に pāmado の語形がアジアの刊本や写本には伝承されている：mā dhammaṃ rāja pāmado「義務に関して，王よ，怠慢であるな（義務を怠るな）」（Śloka d; Ed. PTS pamādo, Ed. Ceylon pamāda, Ed. Thai/Burma/Nālanda ならびに Thai 写本 pāmado）Jātaka VI 94,30 (= V 123,27 = V 422,30 ～ V 223,29); 更に後述2.7.末の引用 (Theragāthā 119c ～ Dhammapada 371a) を参照。2. Sg. pamāda の語形も韻律から本来 *pamado (pra-mada-s) であったと推測される：udaye mā pamāda carassu dhammaṃ「Udayaよ，怠けるな，務めを為せ」Jātaka IV 111,25 = 111,29 = 112,4 = 112,8 (Aupacchandasaka d) (Ed. PTS/Burma/Nālanda/Thai$_1$ pamāda, Ed. Ceylon/Thai$_2$ pamādaṃ)（J. SAKAMOTO-GOTO, Das Udayajātaka, WZKS 28 [1984], 53f. Anm.39 参照）。どちらの場合も伝承過程においてもはや理解されなくなった Inj. が男性名詞 pamāda- (pra-māda-) の Nom.Sg. の形ないし現在形 *pamāda-ti の2. Sg. Imperativ の形に作り変えられたと考えられる。なお現在形 pamajja-ti から形成された疑似 iṣ-Aor. の Inj. pamajji による禁止文（後述2.4.参照）も Pāli 聖典に1例見つけられる: mā pamajji puraṃ idaṃ (v.l. pamajja)「この都をおろそかにするな」Cariyāpiṭaka II 9, 6 (Śloka b; 補語 puraṃ idaṃ については前述2.1.参照) 。

2.3.　これに対し BHS, Amg および JM では Inj.に代わって Kaus.の Imperativ (Iptv.) ないし Optativ (Opt.) が禁止文に現れ，基本動詞と同様の意味で自動詞として用いられる。

2.4.　BHS においては pra-mad の Kaus.Akt.の Iptv.が Lok.の補語と共に自動詞として用いられる：

Mahāvastu III 454,5＝457,3 (Śloka b；ただしこの句は不規則，Vaitālīya？)

mā rāja dhamme pramādaya (vv.ll. prasādāye, māṃ dharmapradāyanā, māṃ dharmādharma pramodaya)「王よ，義務に関して怠るな」

Pāliと同様に Inj. *prāmado (*pra-a-mada-s ; 語頭のprは単子音の価値) が pramādaya のかわりに本来存在していたと仮定すれば、正常な Śloka のリズムが得られる (dhamme の語末のeは短母音の価値とみなす)。

pra-mad の禁止文としては, BHS ではこれ以外には次の1例が知られる：mā pramādyi bheṣyati tuyha dharmo「怠慢であるな，［そうすれば］道理が君のものとなるであろう」Mahāvastu III 124, 18 (Triṣṭubh d); 現在形 pra-mādya-ti から Mi.的な疑似 iṣ-Aor. が形成されている。

2.5. Amg（2例）およびJM（1例）ではKaus.Akt.の2.3.Sg. Opt. pamāyae (pra-mādaye-s, -t) が否定辞 mā または no (na＋u) と共に，基本動詞と同様の自動詞の意味で用いられている。

2.6. Amgの第1例はĀyāraṃga I 2,1 （散文またはJagatīの引用句）(12)である：dhīre muhuttaṃ avi no pamāyae「賢者は一刻たりとも怠けて（ぼんやりして）いてはならない」。muhuttaṃ（muhūrta-「刻（48分）」）は時間の継続を表す Akk（Delbrück 170f.参照）として用いられ，pamāyae は自動詞として「怠ける，ぼんやりしている」を意味している。なお直後の散文中に pra-mad の行為者名詞 pamattā (Nom.Sg.m. *pra-mattṛ-) が現れる。

2.7. Amg の第2例は Uttarajjhayaṇa X 1-36d のリフレイン (Vaitālīya)(13) である：samayaṃ goyama mā pamāyae「一瞬も，ゴータマよ，怠けていてはならない」。この句を含む詩節全体は，例えばX1では以下の通りである：

dumapattae paṇḍuyae jahā　nivaḍai rāigaṇāṇa accae /
evaṃ maṇuyāṇa jīviyaṃ　samayaṃ goyama mā pamāyae //

「夜達（日々）が過ぎ去ると色あせた木の葉が落ちるように，このように人間達の生命も［終わる］。一瞬も，ゴータマよ，怠けていてはならない。」

韻律は第1句において2 mātrā 超過し，dumapattae (drumapātrako) の代わり

に dumapatte (drumapātro) が，paṇḍuyae (*pāṇḍukayo; cf. pāṇḍurako) の代わりに paṇḍue (Ed.Sharpentier v.l.: *pāṇḍuko; cf. pāṇḍuro) が必要とされる。

samaya- (m.) はAmgでは時間の最小単位（瞬きする時間を無数の部分に分割したもの）を表す語であり（An Illustrated Ardha-Magadhi Dictionary, Pāia-sadda-mahaṇṇavo 等参照），Āyāraṃga の例の muhuttam（前述2.6.）と同様に時間の継続を表す Akk.と考えられる。pamāyae も同じく「怠ける，ぼんやりしている」を意味する自動詞と解される。

この見解は伝統的な注釈者や近代以降の研究者にも一般に支持されてきた。例えば，Devendra の注釈では pamāyae は pramādīḥ (pra-mad 2.Sg. Akt. Inj.) および pramadaṃ kṛthāḥ（kṛ 2.Sg.Med.Inj.）で置き換えられ，基本動詞と同じ意味内容が指示されている。Jacobi の訳も同様である："be careful all the while!" (SBE 45, Jaina Sūtras II 41f.)。

これに対し Alsdorf は pamayaeが "forfeit, squander"（無駄にする）という意味の他動詞であり "opportunity"（機会）という意味での samayaṃ を目的語として支配すると解する (Uttarajjhāyā Studies, IIJ 6, 1962, 113)。彼が依拠するのは Böhtlingk 辞書（簡約増補版）における pra-mādaya-ti " (etw.) verscherzen"（ぼんやりして取り逃がす，逸する，軽はずみにより台無しにする）という記述であるが，その典拠は Böhtlingk-Roth における pra-mad (Kaus.1) の項に挙げられている過去分詞 pra-mādita- の1例だけである：pramāditaṃ kīrtim iva「台無しにされた名誉の如く」Rāmāyaṇa V 21, 10。しかしこの語形 pramādita-は Critical Edition においては本文にも異読にも挙げられていない：本文 sannam iva mahākīrtim「消え失せた偉大な名声の如く」，異読 prasāditaṃ kīrtim iva ないし pramoditaṃ...。pra-mad の Kaus.に対する "verscherzen" という意味設定は従って根拠のないものであり，Alsdorf の解釈は受け入れられない。

またAkk. samayaṃ を pra-mad の補語（「あることに関して不注意である，あることを怠る」）とみなすことは，同じ文章構成を示すĀyāraṃga の muhuttam（前述2.6.）と合わせ考えると，内容的に無理がある。

なおこのUttarajjhayaṇaの例はPāli経典の一句と非常に類似している：Theragāthā 119c (Vaitālīyaの1種；Aparāntikā?) jhāya gotama mā ca pamādo (*pāmado)「瞑想せよ，ゴータマよ，怠けていてはならない」～jhāya bhikkhu mā ca pamādo (*pāmado)　Dhammapada 371a (Vaitālīya)（前述2.2.参照）。

2.8.　JMの例はĀvassaya-Nijjutti (Āvas-N) 1290d(14)（Vaitālīyaの変化形，後述）である：suminaṃte mā pamāyae「眠っている状態においても［君は］不注意であってはならない」。この詩節の全体は次の通りである：

sutṭhu vāiyaṃ sutṭhu gāiyaṃ sutṭhu nacciyaṃ sāma suṃdari /

aṇupāliya dīharāiyāo (Ed.3 dīharāiyao) suminaṃte mā pamāyae //

「［君により］見事に演奏された，見事に歌われた，見事に踊られた，色黒の美女よ。長い夜々 (Pl.) を頑張り通した後，眠っている状態においても［君は］不注意であってはならない。」

韻律は第1・2句では Aparāntikā, 第3句 Aupacchandasaka, 第4句 Vaitālīya の奇数句形である(15)。

これに続く散文では，宮廷の宴会で一晩中踊り通した踊り子が明け方に眠り込んでしまった時に，舞踏の師匠である女性 (dhoriginī) が踊り子にこの歌を歌いかけたと説明され，もう一度この詩節が引用される： sutṭhu gāiyaṃ sutṭhu nacciyaṃ sutṭhu vāiyaṃ...　(gāiyaṃ, nacciyaṃ, vāiyaṃの順序が上記と異なる）。この引用詩節に対する Haribhadra の Ṭīkā は次の通り：susṭhu gītam susṭhu narttitaṃ susṭhu vāditaṃ śyāmāyāṃ sundari / anupālitaṃ dīrgharātraṃ svapnānte mā pramādīḥ //。ここでは suminaṃte は svapnānta- の Lok.により，pamāyae は Inj. pramādīḥにより置き換えられている。歌いかけられている踊り子は既に眠り込んでしまっているのだから，Lok. suminaṃte は pra-mad の補語（「あることに関して不注意である，あることを怠る」）ではなく，主語の状況を表す（Delbrück 116参照）と理解される。Balbir 訳 (Stories from Āvaśyaka Commentaries 50) "...don't become careless through sleep!" は Lok.の用法の解釈に関して無理がある。なお Kathāvastu の引用中の osuminaṃte（後

述）と同様に，suminaṃte も suminaṃ と te の２語に分解し，I. HOFFMANN 訳（後述）のごとくに「眠りが君を不注意な状態にしないように」（sum iṇ aṃ Nom., te Akk.Sg. 2 人称代名詞, pamāyae 3.Sg.）と解することが不可能ではないが，Absolutiv anupāliya の行為者＝踊り子＝te (Akk.) ということになる（Absolutiv の行為者が Akk. で表される例については SPEIJER, Sanskrit Syntax, Leiden 1886, rep. Delhi 1973, 298: § 380参照）。

上記の詩節は同様の物語と共に後代のジャイナ説話集[16]に現れる。Kathākośa（サンスクリット説話集）[17]における対応詩節は次の通り (I. HOFFMANN 43)：

suṣṭhu gītaṃ suṣṭhu nartitaṃ suṣṭhu vāditam /

dīrgha-rātram atikramya mā pramādīr niśātyaye //

「...長い夜 (Sg.) を過ごし終わった後，夜が過ぎても不注意であってはいけない」

第1・2句の韻律は不明；第3・4句は Śloka である。詩節全体が Āvas-N を基に Śloka に作り直されたが，何らかの事情で第1・2句の形が崩れたかと推測される。Kaus. pamāyae は基本動詞の Inj. pramādīs で置き換えられている。この説話の最後に Āvas-N の詩節が引用されている (I. HOFFMANN 45, 47)：

Āvaśyaka-siddhānta uktam:

suṭṭhu gāiyaṃ suṭṭhu vāiyaṃ suṭṭhu nacciyaṃ sāma-sundari /

aṇupāliya dīha-rāiṃ osuminaṃ te mā pamāyae //

"...achtlos machen möge nicht der Schlaf dich, die aushielt schon die ganze Nacht lang." (I. HOFFMANN 48)

ここでは vāiyaṃ, gāiyaṃ, nacciyaṃ の順序が Āvas-N 1290 ともその散文中の引用詩節とも異なるほか，dīharāiyāo（*dīrgha-rātrika- の Akk. Pl.）が dīha-rāiṃ（dīrgha-rātri-のAkk.Sg.）に変わり，また suminaṃte が osuminaṃ te に変わっている。（更に I. HOFFMANN は sāma と sundari を複合語とみなす。）韻律は第1・2句では Āvas-N と同様に Aparāntikā であるが，第3句は Śloka に，第4句は普通の Vaitālīya に変化している。

I. Hoffmann の解釈によると osumiṇaṃ (*avasvapnam) は主語，te は目的語（2人称代名詞），pamāyae は 3.Sg.で使役の意味「ある人を (Akk.) 不注意な状態にする」を持つ（Absolutive anupāliya の行為者は Akk.Sg. te となる）。一般に写本においては各単語が連続して書かれるので，osumiṇaṃ te は osumiṇaṃte と読み，Lok.Sg. と解することができる。前述の sumiṇaṃte と同様にこの osumiṇaṃte も二様の解釈を許すが、いずれにせよ，osumiṇa- (Ai. ava-svapna-) ないし osuminaṃte (Ai. ava-svapnānta-) の語は Ai.でも Mi.でも他に用例が知られず，第4句の韻律を普通の Vaitāliya に変えるためにその場限りで作られた人造語 (Augenblicksbildung) と思われる。

Haribhadra の注釈においても Kathākośa のサンスクリット詩節においても，Kaus. pamāyae が基本動詞の Inj.で置き換えられている事は，Jaina 経典の伝統の中で禁止文における pamāyae の自動詞用法が定着していた事を推測させる。

3．上記のような BHS, Amg, JM の禁止文における pra-mad の Kaus.の自動詞としての用法は，男性名詞 pra-māda- (Mi. pamāda-/pamāya-)「不注意、怠慢」の Denominativ と解することも可能であるが[18]、むしろ Kaus.の reflexiv Med. *pra-mādaya-te「自分自身を不注意／怠慢な状態にする」すなわち「自分自身が不注意／怠慢になる，～である」に由来すると想定する事により無理なく説明することができる。先に 1.5. で述べたように，このような Kaus. Med.の表現法をとることにより，主語自身の意志に基づいて基本動詞の行為が行われること，即ち，主語自身の責任が強調されていると考えられる。Ai. に pra-mad の Kaus.Med.の直接の痕跡を見つけることはできないが，Simplex mad の Kaus.の reflexiv Med.が Ṛgveda に頻出すること，更に，pra-mad の Inj.による禁止文が Veda から Pāli に至るまで決まり文句として愛用されている事実を考慮すると，その伝統の上に立って，何らかの理由により[19] BHS と Jaina 経典で Kaus.（語幹: pra-mādaya-）の Iptv. ないし Opt. が Inj.（語幹: pra-mada-）の代用として自動詞の意味で用いられるに至った可能性が強い。

註

(1) この問題は研究者の注目を引いていたが，ほとんど解明されていなかった：v. HINÜBER, Das ältere Mittelindisch im Überblick, Wien 1896, § 415；EDGERTON, Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar § 38.21, 38.23, 38.58 参照。後者には他に由来するものをも含めてこの種の動詞が集められている。

(2) Passiv 語形が Med.語形の代わりに用いられる現象は既に指摘されている：GEIGER, Pāli Literatur und Sprache, Straßburg 1926 = Pāli Literature and Language (transl. B. GHOSH, Calcutta 1943) § 175.1, 176.1; v. HINÜBER § 415.

(3) EDGERTON は kālaṃ の脱落と解する（"spend time" Buddhist Sanskrit Dictionary s.v.参照）。

(4) たとえば世尊の最後の言葉：appamādena sampādetha「怠慢ならざることにより君達は自らを完成せよ（自らに理想を成就せしめよ）」(Dīgha-Nikāya II 156,2＝120, 14)。

(5) ohāre-ti および acchāde-ti は特に次の出家の際の定型表現に現れる：kesa-massuṃ ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyaṃ pabbajjati「髪と鬚を取り除き，赤褐色の衣を纏い，家から家無き生活へと出て行く」。筆者:「髪と鬚」『仏教における聖と俗』(1994)＝日本仏教学会年報第59号，77–90，特に80参照。

(6) phusse-ti の語根母音 u は基本動詞の現在語幹 phusa-ti (< Ai. spṛśa-ti) からの影響によると思われる。Pāli では基本動詞 phusa-ti (/phussa-ti/phuse-ti/phassa-ti)「触れる，到達する，苦しむ，抵触する，傷つける」と Kaus. phāse-ti/phusse-ti の意味分化が明瞭である。

(7) phāsa-i の語幹母音 a は二次的と思われる。基本動詞の現在語幹は Pāli 同様に phusa-i。

(8) 註５参照。

(9) BÖHTLINGK-ROTH および GRASSMANN に pra＋mad の Kaus.Med.として記載されている ṚV I 109,5 prácarṣaṇī mādayethām (Padapāṭha: prá carṣaṇī) については OLDENBERG, Ṛgveda. Textkritische und exegetische Noten. Erstes bis sechstes Buch (Berlin 1909) ad. loc. 参照。

(10) pamadamhase = Inj.語幹 ＋ Mi.的 Med.語尾：Jātaka III 131,16 (Śloka d)。

(11) 散文では次の定型句にのみ知られる：moggallāna moggallāna mā brāhmaṇa ariyaṃ tuṇhībhāvaṃ（更に paṭhamaṃ jhānaṃ 等）pamādo「Moggallānaよ，moggallānaよ，バラモンよ、貴い沈黙（初禅，等）に関して怠慢であってはならない／怠けてはならない」Saṃyutta-Nikāya II 273,26; IV 263,20; 264,13; 265,3; 265,29; 266,21; 267,12; 267,34; 268,23; 269,10。韻文では Vinaya II 195,30 (Vaitālīya), Dhammapada 371a (Vaitālīya) ～Theragāthā 119c (Vaitālīyaの１種; Aparāntikā?)（2.7.参照）, Jātaka III 412,6 (Vaitālīya a), IV 422,30＝V 123,27＝VI 94,30～V 233,29 (Śloka d)（2.2.参照）。

(12) Ed. SCHÜBRING, Leipzig 1910 (Abh.f.d.Kunde d.Morgenlandes XII), p.6: I 2,1,3；Ed. Jaina-Āgama-Series II-1, Bombay 1976, p.18: I 2,1 Sūtra 番号65; Ed. Lālā-Sundaralāla-Jaina-Āgama-Granthamālā I, Delhi 1978, p.71: I 2,1 Sūtra 番号65; Ed. Aṃgasuttāni I, Ladnun 1975, p.18: I 2,1,11; Ed. MAHĀPRAJÑA (Jaina Canonical Text Series 1), Ladnun 1981, p.90: I 2,1,11.

(13) Ed. CHARPENTIER, Uppsala 1922, p.101–105; Ed. Jaina-Āgama-Series XV, Bombay 1972, p.127-131.

(14) Bhadrabāhu の Āvas-N には次の刊本がある：1. Āvaśyaka-vṛtti (Haribhadra), Bombay, Āgamodayasamiti, 1916–17; 2. Āvaśyaka-cūrṇi, 2 vols. Ratlam 1928–29; 3. Āvaśyaka-niryukti（Haribhadra の Ṭīkā を伴う）, Ed.1 の rep.版，Bombay 1982；筆者は3.を使用し，かつ1.と2.の読みを N.BALBIR の教示により知り得た。この部分は彼女の "Stories from the Āvaśyaka Commentaries" (The Clever Adulteress and Other Stories. A Treasury of Jain Literature. Ed. by Ph. GRANOFF. Ney York 1990) 49–50に訳され，また Āvaśyaka-Studien I (Alt- und Neu-Indische Studien 45-1, Hamburg 1993) 183に要約されているが，当該詩節の訳 (Stories... 50 "...don't become careless through sleep!") および韻律に関する注記（註15参照）は筆者の見解と相違する。

(15) Aparāntikā＝４×UUU－UUU－U－U－（Piṅgala VI 41; Kedārabhaṭṭa II 19; Jayadeva IV 9; Vuttodaya 35; Saddanīti IV Appendix 8.4.1,8 は４×－U－U－－U－U－）。ただし Jayakīrti VI 14, 19, 24および Hemacandra III 59によると４×Vaitālīya 偶数句形（8 mātrā＋－U－U－）。また Jayakīrti VI 15, 20,25および Hemacandra III 60によると４×Vaitālīya 奇数句形（6 mātrā＋－U－U－）が Cāruhāsinī と呼ばれるので，当該詩節の第4句はこれに当たる。しかし，他の韻律書では Cāruhāsinī の形は４×U－UUU－U－U－に限られるので，第4句とは一致しない（Piṅgala IV 40; Kedārabhaṭṭa II 20; Jayadeva IV 22; Vuttodaya 36; Saddanīti IV Appendix 8.4.1,7 は４×U－U－－U－U－）。上記の韻律はいずれも Vaitālīya の変種である（本稿末尾＊参照）。BALBIR による韻律に関する注記 (Stories... 69: n.15; Āvaśyaka-Studien I 55 "troi pāda de vaitālīya et un pāda de cāruhāsinī") は正確で

ない。

(16) BALBIR, Āvaśyaka-Studies I 183参照 (Upadeśapada Gāthā 130; Dharmopadeśamālā-vivaraṇa 62.28 – 66.28 (No.19); Kathāvastu（後述註17）。Upadeśapadaと Dharmopadeśamālā-vivaraṇaのテキストは筆者の手元になく参照できなかった。

(17) I. HOFFMANN: Der Kathākośa. Text und Übersetzung mit bibliographischen Anmekungen. München 1974。 対応する説話のテキストと訳は p.39–48: VII Yaśobhadra oder Über das Wort zur rechten Zeit にある。

(18) 現在語幹 pra-mā́dya-ti, pamajja-ti, pamajja-i が、 Ai. と Mi. を通じて非常によく用いられているので、そのうえ更に同じ意味を表現するために Denominativ が形成される必要は小さかったと思われるが、歴史的 Inj.から発展した Pāli の pāmado が伝承過程において一貫して男性名詞 Nom.Sg. pamādo と改変された事情を考慮すると、Inj. の代用としての Denom. の形成の可能性も排除できない。なお、JAMISON (Function and Form in -áya- Formations of the Rig Veda and Atharva Veda, Göttingen 1983, 74f.) は、Ṛgveda 及び関連マントラに頻出する Simplex mādáyate を Denom. と説明するが、これは Kaus. med. であることが機能上も形態上も明白である。JAMISON の同書については筆者 Zu mittelindischen Verben aus medialen Kausativa 298 Anm.5 参照。

(19) Amg.の mā pamāyae 3例がすべて Vaitālīya の cadence に現れること，および BHS の pramādaya も Vaitālīya の cadence のリズムを与える（詩節全体は Śloka）ことから，このKaus.語形の形成が韻律上の必要性と関わっていた可能性が考えられる。

* Vaitālīyaとそのグループに属する韻律（Aupacchandasaka, Aparāntikā, Cāruhāsinī等）については筆者による「パーリ・ジャータカにおけるマートラー・チャンダスの性格」（仏教研究第7号 1978, 43-64），「パーリ・ジャータカにおけるマートラー・チャンダスの形態」（印度学仏教学研究第26巻2号 1978, 990-995）ならびにパリ第3大学提出博士論文 “Les stances en mātrāchandas dans le Jātaka pāli”（1982; 未刊行）参照。

Uttarajjhayaṇa X 1-36d
samayaṃ goyama mā pamāyae
– Middle Indian Verbs from Medial Causatives –

Junko SAKAMOTO-GOTO

In Middle Indo-Aryan, there are a number of verbs whose origin is to be found in medial causatives in Old Indo-Aryan. Since the medium is, except for some relict forms, no longer alive as a grammatical category in Middle Indian, those verbs formally correspond to active forms of the *-aya-* or *-paya-* present in Old Indian. Considering their meaning, however, they can be explained neither by the historical development of active causatives nor in some other way, for example, by the assumption of a new formation of the *-e-* present in Middle Indian, a denominative, or an ellipsis of objects. The caus., having the function of adding a factitive meaning to the basic verb, is originally conjugated in the medial voice when a reflexive, affective or reciprocal meaning is distinctively to be expressed. According as to whether the basic verb is intransitive or transitive, the medial caus. is classified into 7 groups. On this problem cf. the author: Zu mittelindischen Verben aus medialen Kausativa, Jain Studies in Honour of Jozef DELEU, Tokyo 1993, 261–314.

The reflexive medium of the caus. to the intrans. basic verb comes to have approximately the same meaning as that of the basic verb, e.g. *máda-ti/mā́dya-ti* 'rejoice (intrans.), be drunk', *mādáya-ti* 'rejoice (trans.), intoxicate', *mādáya-te* 'rejoice oneself, intoxicate oneself' as attested many times in the Ṛgveda.

In the Buddhist and Jaina Canon, the caus. of *pra-mad* is used in the intrans. meaning 'be careless, negligent' in prohibitive sentences: *mā ... pramādaya* Mahāvastu, *no/mā pamāyae* Uttarajjhayaṇa, Āyāraṃga, Āvassaya-Nijjutti. These caus.-forms replace the historical injunctive *pra-mada-*, which is very productive from the Veda to the Pāli Canon. This intrans. use of the caus. to *pra-mad* probably had its origin in the reflexive medium of the caus.

ジャイナ教研究

第二号

＜論　文＞

＜報告＞

＜ニュース＞

1996年9月

ジャイナ教研究会